# 民話に学ぶ愛の心

西本　鶏介

民話は、私たち祖先の精神生活を知る大切な資料である。合理主義にならされた現代人の目には、たとえ荒唐無稽な話に見えても、そこに描かれる善と悪、幸福と不幸の思想は自然とともに生きる人々の生活の知恵としてあるいは人間的欲望を充たす手段として、長い歴史を生き続けてきた。

彼等は民話を語り、聞くことによって苦しい現実の生活を忘れ、楽しい未来を夢みようとする。いいかえれば、民話は彼等の願いをただちにかなえてくれる理想の世界であり、つらい現実を生き抜く心のよりどころでもあったのだ。

民話の世界では、当り前で正直な人間であれば、いつかは幸せになることができる。知恵があって、たくましい人間であれば、どんな難事も切り抜けることが可能である人間は、必ず手痛いしっぺ返しを受ける。民話では特別の地位も財産もない庶民こそがスターであり、幸運を得る資格があるのだ。

浦島太郎が海底の楽園に住む美しい乙姫と結婚できたのも、亀を助けてあげたからであり、雪の日に傷ついた鶴を助けてあげたおじいさんは、人間の女に変身した鶴からすばらしい恩返しを受ける。

それは生き物をかわいがれというモラルのみを説くためではない。生きるために殺さなくてはならない動物たちも、自然の中では人間の親しい友であり、彼等の信仰と結びつく共同生活者でもあったからである。

しかし、なんといっても大切なのは人間と人間の触れあいだ。同じ村に生きる人々にとって自分のよろこびは他人のよろこびであり、他人のかなしみは自分のかなしみとして味わわなくてはならない。だれもが同じ立場、肩を寄せあい、助けあうことによって村の社会は成りたっていた。

そのためには、人間はどうあるべきか、どうすれば一つの村の結束と調和をはかることができるか、彼等は、それを民話で語り、聞くことによって学んできた。身近な面白い話である故に、他人事として語られても、だれもが共感をもって聞くことができた。そこに描かれる人生の知恵は、たとえ時代がかわり、環境がかわろうとも色あせることはない。人間についての普遍的な真理が見事にとらえられているからだ。

例えば、「姑の毒殺」という民話がある。

昔、ひどく仲の悪い嫁と姑があった。姑がたまたま病気になったので、嫁はこのまま殺してしまおうと考えた。そこで、医者のところへ行って、姑を殺す薬をくれという。嫁に同情した医者は「毎日ご馳走をくわせ、それに少量づつ、毒薬をまぜれば病死に見せかけることができる」といって薬をくれる。

すっかりよろこんだ嫁は、それから毎日のように姑の好ぎなものをつくり、それに毒薬をまぜて食わせる。姑はあいかわらず嫁につらくあたるが、気づかれては大変と、嫁は心にもない親切をつくす。ところが、そのうちに嫁の親切を真実のものと誤解した姑が、涙を流して、これまでの自分の非をわびる。一方、嫁の方も、心から悔いる姑の姿に打たれるとともに、芝居のつもりの親切が、いつの間にか本物になっていたことに気がつき、はっとする。だが、もはや手おくれ毒薬はいくらも残っていない。

嫁は医者のところへかけつけ、なんとか姑の生命を助けてくれと涙ながらに訴える。すると医者はにっこり笑っていう。「なに、心配するな。あれは病気をなおす本物の薬だ。」そんなことがあってから、嫁と姑の仲は人もうらやむほどになったという。

嫁と姑の関係は古くて新しい問題である。その葛藤のすさまじさは、もはや改めていうまでもないだろう。別居でもしない限り一度こじれた仲は容易に取りもどすことはできない。嫁の地位が不当に低かった昔は、意地悪な姑の前で、嫁はただひたすらに耐えるより他に道がなかった。だが、どこかに解決の道があるはずだ。そんな苦い生活体験が、こんな民話を生みだしたのだろう。

「胸の上で煮る小豆」という民話がある。昔、ある男が毎晩のように他の女の許へ通い、夜明けにもどってきた。夫恋しさと、くやしさで、女房はいつまでも眠ることができない。ふと、夫が小豆の好きなことを思い出す。夫のかわりに茶わんに小豆をいれ、それを胸に抱いて寝た。すると不思議なことに、夫が帰る頃、小豆は丁度うまい具合に煮えていた。夫はよろこんで、その小豆を食べる。次の日も、その次の日も、小豆は煮えていた。ある日、夫は、どうしてこんなにうまく小豆を煮るのか女房にたずねた。そこで女房は涙ながらにいう。「あなたを恋しいと思う胸の火で煮ました」と。夫はそれを聞いて、はっと胸をつかれた。こんないい女房をなぜ自分は見捨てていたのか。夫は心を改め、二度と他の女の許へ通うことがなかった。

いささか男に都合のいい話だが、夫婦の愛を描いて胸の痛くなる民話だ。耐えがたいかなしみに耐えることで、この女房は夫の愛を取りもどした。夫を責めたてたところでどうなるものでもない。そんなことをすれば火に油を注ぐようなものである。どんな非道な夫であっても、愛するかぎり、この女房のとった行為を、なんでおろかな行為と笑うことができようか。ここには浮気の夫をいさめる妻の生活の知恵がたくみに描かれ、つまらない人生相談の解答より、はるかに説得力がある。

このわずか二つの民話を読むだけでも、私たちは、そこに昔の人たちの大らかで深い愛の心を知ることができる。どんなものにも、熱い思いを寄せずにはいられなかった空想が、より人間的であろうとする原理を、だれにもわかりやすく解き明かしてくれるのである。民話を面白いつくり話としてのみ聞くのではなく、それを生みだした名もない庶民の声までも聞きとろうとする時、それは確かな力となって、私たちをはげましてくれる。